

### <中本正智博士 著書紹介> 『日本語の表現と構造』

名嘉真, 三成

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

84

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

1995-02-24

# 『日本語の表現と構造』

名嘉真 三 成

本書は1980年3月、エポナ出版より上梓された。中本博士の著書としては、第5番目のものである。これまでの著書が琉球方言に関するものであり、主に方言研究に情熱を注いで来た中本博士にすれば、珍しく趣を異にする書物と言える。なぜなら、本書は日本語の基本的かつ一般的な知識を論じた、いわば「日本語概論」と呼ぶにふさわしい日本語に関する啓蒙書だからである。従って、大学での講義用のテキストとして、また日本語に興味のある一般の方々に読んでいただきたい書物である。

さて、第一章は言語の有する一般的特色について論じる。言語と社会の関わり、言語の表象性、線状性、分節性、瞬間性などについて、分かりやすく述べられている。また、言語はなぜ変化するのか、それはどのように変化するのかにも触れ、第二章の記述的研究や歴史的な研究など言語の研究手法とも有機的に結びついている。

第三章から第六章は、日本語の具体的分析とその論述である。このうち第三章は音韻に関する分野で、現代共通語の音韻的特色および上代日本語の音韻体系から現代語までの通時的変化の実態などについて、詳しく述べている。その中で、四ツ仮名の崩壊とその要因に関する論述は、これまで誰も言及しなかったことであり、それを中本博士は一般音声学の立場から見事に論証した。

次章は語彙の分野である。中本博士は語彙体系や類義語の意味研究については、特に力を注いだ。本章では、まず意味の分析と記述方法を示し、その方法に基づいて名詞語彙、動詞語彙、形容詞語彙など約70語の類義語について、具体的に意味分析を行っている。語彙の意味論的研究は比較的新しくかつ難しい分野であり、従来の日本語に関する概説書はこの分野の記述が十分でなかった。しかし、本書の意味論的研究は記述方法にしても意義素の分析結果にしても、優れて圧巻である。

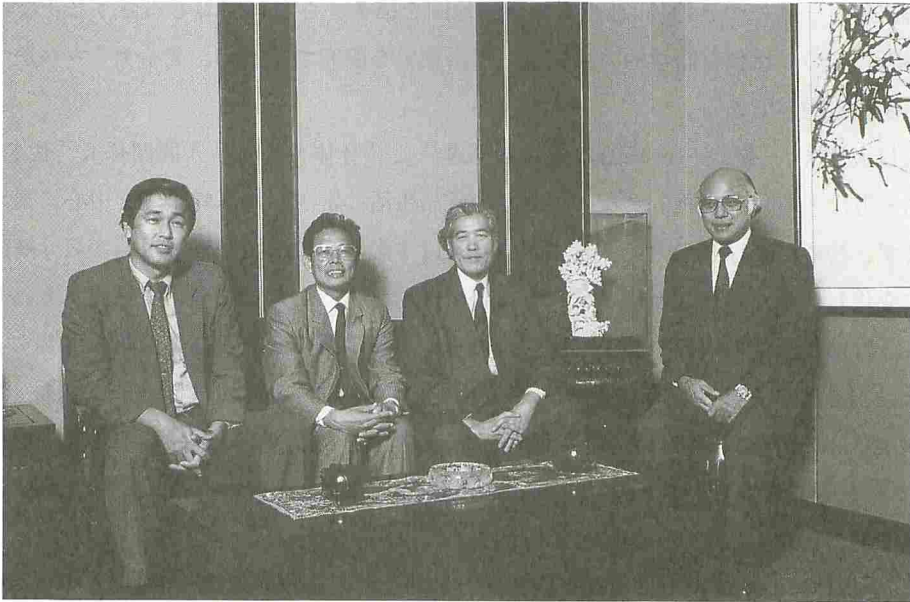
第五章は文法に関して論述する。語のレベルの文法論が多く記述される中で、文のレベルの文法論に重きを置いた点が注目される。例えば、文とイントネーションの関係、文の構成、主語と述語、修飾語、テンス・アスペクトなどに関する記述が見られ、構文論を研究する基本的事項を学ぶのに適している。

方言と共通語の関係を述べたのが第6章である。全国の方言区画図を示し、諸地域の重要な方言的特色を明示する。琉球方言を例にすると、音韻では半広母音の狭母音化、喉頭化現象、ハ行P音の残存、先島のワ行b音と唇歯摩擦音、語彙ではチム（肝）、ウミ（思い）、フ

シバリ（星晴れ）、ケーシ（返し）などの意味・用法、そして文法では動詞・形容詞の終止形の成立、これらのことが理解しやすく記述されている。また、方言の研究方法や調査方法を示したことは、これから言語研究を志す人々にとって有難い。

終章は日本語研究の歴史に関してである。契沖、宣長、富士谷成章などの江戸時代の研究から現代までの日本語の研究史を述べる。ソシュール、トゥルベツコイの言語理論、サピア、ブルームフィールドの構造言語学、チョムスキーの生成文法など、外国人の言語理論がいかに日本語研究に影響を与えたかについても理解できる。

なお、本著は改訂されてさらに充実し、1981年3月に『日本語の原景－日本列島の言語学－』（力富書房）として出版された。（琉球大学教授）



国際学術調査のため福建師範大学教授王輝華氏を囲む座談会(雑誌「法政」掲載)の記念写真(1992)